

精神医療の専門性 「治す」とは異なるいくつかの試み

近田真美子＝著
本体2000円＋税
医学書院 ☎03-3817-5600



精神医療の専門性を問い直す

訪問看護ステーションのり 小瀬古伸幸

読後の感想は「衝撃」の一言に尽きる。何が衝撃かと言っと、これまで私たち精神科医療に携わる者が重視してきた経験の持つ意味が、現象学という手法を用いて見事に言葉にされ、本書のなかに散りばめられているのである。

なぜその支援者はくじけず寄り添えるのか？

本書はACT (Assertive Community Treatment) に従事する支援者の実践を事象への意味づけという段階から可視化した、著者の博士論文がもとになっている。ACTでは重度の精神障がい者の地域生活を24時間、365日支えるという性質から、その専門性は高く、他の在宅ケアでの活用は難しいと考えられがちである。しかし、本書を読めば、その思い込みは一蹴され、むしろ共通項が多く、私たちが上手く言葉にできなかった「治す」とは異なる試みの本質的な意味が理解できる。

例えば、p.13に「安里氏の実践は、利用者」と苦楽を共にし、彼らの素の姿が見えてく

るという見え方の変化が地域生活支援を可能にすることを示していた」と記されている。私たち精神科訪問看護の実践においても、苦労を苦労のまま受け入れ、その苦労を共有しながら試行錯誤していくプロセスを重視している。そして、その苦労を乗り越えた先には、笑顔や喜びも分かち合えるものだと考えている。この関係性には「寄り添う」という体験の共有が内包されており、それがケアとして意味を持つものだと思っている。

しかし、私の実践において、それだけでは説明のつかない側面もあった。それは「なぜ、支援者はその大変さにくじけず、寄り添えるのか」ということである。その問いに対するひとつの答えが、近田氏の記した「彼らの素の姿が見えてくる」という見え方の変化が地域生活支援を可能にする」という言葉にあった。つまり、その試行錯誤に追い詰められたときにこそ、本来のその人らしい姿や望む人生の方向性が浮かび上がり、その時間を共にすることによって、医療の枠を超えた素の姿を受け入れる自然な現象が起こっていたのではないかと考える。

混ざり合う専門性

このように在宅支援者として私たちが行っている実践には、専門書には記載されていないが、その人の本質的な理解を促す関わりが含まれている。これは、直線的に考えれば専門的知識の文脈にはあまり適合せず、医療とは異なる見え方になるかもしれない。ところが、近田氏の述べる「専門性の主体化」という観点から考えると、それは医療と異なるものではなく、むしろ混ざり合うものであるという意味が理解できる。最後に私が最も印象に残った近田氏の言葉を紹介したい。

「問題は専門性の方向なのだ」

この言葉を聞くと、また「専門性とは何か？」という、目的地の見えない旅が始まるかもしれない。しかし、精神科医療の専門性とは、そういうものであり、そういうものであることを忘れてはいけないと思う。